

古いアルバート街の物語

脚本 アレクセイ・アルブゾフ

訳 和田豊

脚色 永妻晃

クリスト「クジマー、坐れ、そんなうろろしてないで落ち着
けよ」

クジマー「それより、どうしてあんな人間とつき合っているのか説明してもらいたいね」

クリスト「誰のことだよ？」

クジマー「今、ベッドルームで寝ている男だ」

クリスト「男じゃない、お前のオヤジだ……それで、何しに来
た？」

クジマー「(攻撃的に) 今日、わたしの銀行口座に三十万のお
金が振り込まれていた」

クリスト「おお、お前なにした？」

クジマー「今のわたしにお金になることで何も出来やしないよ。

かあさんが残してくれた貯金で生きてる」

クリスト「幸せな奴だな。それに三十万は……こころあたりは
なるのか？」

クジマー「いいか、よく聞けよ、とうへんぼく唐変木」

クリスト「唐変木とはなんだ？」

クジマー「わからずや、気が効かない奴、間抜けを唐変木とい
うのだ」

クリスト「その俺に何を聞かそうと言うのか？」

クジマー「いいか、唐変木」

クリスト「二度はいい、続き……」

クジマー「銀行口座の差出人は、『シャーウッドの森のロビ
ン・フッド』からだ」

クリスト「おお、英雄からか？」

クジマー「あいつは盗賊だ偽善者だ。善人面してひとをバカに
する権利がどこにあるんだ？ いい年こいて悪ふざけ
ばかりする」

クリスト「そのロビン・フッドを叩き起こしてこようか？」

クジマー「ああ、奴の面にこの三十万を叩きつけてやる」

クリスト「クジマー、よく聞けよ、死んだお前のお母さんを

ふくめ、かつての彼の妻たちは、みんな彼を捨てた……

可哀相と思わないのか」

クジマー「そうさせたのは自分だろ……あいつは誰も必要じゃ

なかったんだ。あいつの作る人形が生きた人間の身代わ

りだったんだ。いいか、奴に言っとけよ」

クリスト「何だ、この唐変木に言伝ことづてか」

クジマー「絶対あいつより偉くなってみせる！ とな！」

クリスト「それだけか？」

クジマー「あいつの出番は終わったんだ。劇団だってもう用は

ないって言ってるんだ」

クリスト「(不安に) 何の話だ？」

クジマー「『美しきヘレーネ』の人形制作の担当は、ペーチキ

ンに決まったんだ」

クリスト「誰が言った？」

クジマー「劇団のみんなは知ってるぞ」

クリスト「ほうー、だからどうした？ そんなつまらん仕事は

ペーチキンにやらしとけ。いいかお前のオヤジは一流な

んだ」

クジマー「……三十万はロビン・フッドに返しておいてくれ」

クリスト「クジマー、俺の親父はお前のことを子どものころか

ら知っていた。俺はそのおやじからお前の事を頼まれた」

クジマー「分ってるよ、あんたのオヤジさんは何度とおやじと

の間に入ってくれた。なにしろ奴とは」

クリスト「たまにはお父さんとでもいえないのか？」

クジマー「言えるかッ、何しろ生まれた時から敵対関係にある

ようなものだからな。未だ許せないんだ！ とくに奴が女

どもという時には、もうカッカキちやう！」

クリスト「(隣室のドアを見て)クジマー、いい子だ、台所へ行く」

クジマー「どうして？」

クリスト「水ギョーザの作り方、教えてやる」

クジマー「おしまいまで聞けよ。わたしはね、奴に勝たくちやならない。おぎやあと生まれた時から、そう決めたんだよ」

クリスト「おお、何と早熟な」

クジマー「奴は言った、『このガキヤア猿にそっくりだ』って」

クリスト「何という驚愕的な記憶力」

クジマー「母さんから聞いたんだよ」

クリスト「だろうな」

クジマー「わたしは奴の鼻をあかしてやる。絶対に勝って見せる！」

クリスト「クジマー、俺はお前のことを俺のオヤジから頼まれたんだ」

クジマー「何だよ、さっきから」

クリスト「いいか、ペーチキンのこともよく知っている。ペーチキンはオヤジさんの弟子でオヤジさんを尊敬している：

…おい、なりすましペーチキン」

クジマー「何だそりゃ？」

クリスト「ペーチキンはオヤジさんを出し抜くような人間じゃない。はじめからお前の嘘は分かってんだよ。いいか、俺

はな……」

クジマー「お前のオヤジさんから俺の事頼まれたんだろう、もう耳にタコだ！」

クリスト「そうか、じゃそのタコの言うことを聞け……。いいかオヤジさんはもう歳だ。あんたには先がある。『美しきへ

レーネ』の仕事はオヤジさんにやらせてやれ」

クジマー「……」

クリスト「タコからの頼みだ。いや唐変木からも頼む」

パジャマ姿のヴィクトシヤが現れる。

クジマー「何だ？ 何だ？ 何だ？ どういうの、これ？ あ

ッ、オヤジのパジャマ着て……また女か！」

クリスト「ご紹介する」

クジマー「娼婦か？」

クリスト「ちやう！ お名は……」

ヴィクト「ヴィクトーシヤと言います。このアパートに知り合

いがいてモスクワからタベ訪ねて来たんだけど、その知り

合いは引越しちゃっていたのよ。連絡せずに突然訪ねて

来たわたしが悪いんだけど……それで泊まる場所がなく

て困って……お隣さんをノックしたら」

クリスト「ロビン・フッド氏が顔を出して」

ヴィクト『ロビン・フッド？』

クリスト「あ、あの方の別名ね……ヴィクトーシヤから事情を

聞いて」

ヴィクト「“泊まってゆけば”って……どうしたの？ そんな

泣きそうな顔して、クリストこの方は？」

クリスト「ヴィクトシヤ、このお方は……」

クジマー「(悲嘆にくれて) どうでもいいよ」

クリスト「どうでもいい、と言うお人です」

ヴィクト「ふざけないで下さい。お名前は？」

クジマー「……」

クリスト「名前ぐらい言ってもいいだろう、どうでもいい人」

クジマー「……変な名前で、みんな笑うから」

ヴィクト「わたしも笑うかしら？」

クジマー「笑う！」

クリスト「どうでもいい人、何故決めつける」

ヴィクト「教えて？」

クジマー「笑う！」

ヴィクト「人の名前を笑うなんて不謹慎な事はしません……」

クジマー「よし、じゃ言ってみよう」

クリスト「どうぞ！」

クジマー「……クジマー」

ヴィクト「(ジッとクジマーを見て)……いい名前！」

クリスト「だとき」

クジマー「……ホントウ？」

ヴィクト「やさしいお母さんだけが、そんな珍しくて素敵な名

前を考えつくのよ」

クジマー「母じゃない、奴だ」

クリスト「奴じゃない」

クジマー「バリヤース・ニコフがつけたんだ」

ヴィクト「そうか？ ……どうして、すぐ気がつかなかったん

だろう……あなた、お父さんそっくり」

F・O

F・I

クリストをクジマーがいる。

クリスト「で、何だ今日は？」

クジマー「賽さいは投げられたぞ！」

クリスト「お前、劇団に人形のスケッチを持って行ったのか？」

クジマー「ああ、上手くいったよ、最高の出来だ。支配人も大

喜び、全ては決まった……奴はいるか？」

クリスト「……古きアルバート街の散歩に出かけた」

クジマー「こんなどしゃ降りの雨の中を、あの女ひととか？」

クリスト「彼女は、おやじさんに良い影響を与えている。おや

じさんがあんなに楽しそうに仕事するのは久しぶりだ。情

熱の炎で火事になっちゃったって感じだな。ちよつと心配
なくらいだ」

クジマー「あの女と奴は上手くいつてるみたいだな」

クリスト「ヴィクトーシヤとはほとんど口も聞いていない。ヴ
ィクトーシヤにはロシアに婚約者がいるそうだ。このどし
や降りの中を散歩に出かけたのは、今朝仕事が終わったか
らだ。疲労困憊ひろうこんばい、おやじさんはぶっ倒れるところだった」

クジマー「何の仕事？」

クリスト『『美しきヘレーネ』の人形制作だ』

クジマー「だってそれは？」

クリスト「別にかまわないだろう」

クジマー「完成したの……」

クリスト「ああ、見るか？」

クジマー「……」

クリスト「「お、あの声はヴィクトーシヤ、帰って来た……」

クジマー「クリスト、決心したよ！ 今日は何もかもぶちま

てやる！」

クリスト「何を？」

クジマー「人形のこと、わたしが勝ったことを劇団から聞いた
ら、奴はショックで死んじゃうかもしれないからな。わた
し自身の口から言ってやる」

クリスト「……ま、いいだろう。クジマー、おだやかにな」

クリスト、ドアを開けに行く。

バリエースとヴィクトーシヤが入って来る。

ヴィクト、バリエースに、

「あなたって、水たまり跳び越すのうまいのね。えッ？

分かったわ」

クリスト「どうしたんだ、バリエースはいきなり台所に行って」

ヴィクト「ちよつとね」

クジマー「じゃ」

クリスト「どうした？」

クジマー「帰る」

ヴィクト「ちよつと待って、外は雨、みんなとお茶でも飲んで

雨の止むのを待つ……どう？」

クジマー「でも……」

ヴィクト「クジマーは喜んでお茶に付き合うって」

クリスト「おやじさんな、あんたが来てくれると本当はうれし

いんだよ」

ヴィクト「そうよ、『今日は特別な日だから。俺様が世界一の

おいしい紅茶をいれてやる』って、それと、『例のペーチキ

ンはどうしてるかな、あの若き才能は？』って」

クジマー「ペーチキンが気になるんだ？」

クリスト「本当の所はな……」

ヴィクト「お父さんね、『自分の娘がペーチキンなんかに出し

抜かれた』って、怒ってるのよ」

クジマー「まさか?!」

ヴィクト「そうだ……いいもの見せてあげる……ほら、あそこ

……クリスト」

クリスト「……よし」

クリスト、棚に近づき布を取る。

ヴィクト「どう……『美しきヘレーネ』よ」

クリスト「素晴らしいだろ……おやじさんの精神込めた作品

だ」

ヴィクト「衣裳担当はあたし……可愛いでしょ……あれっ……

ちよつと待って？」

クリスト「どうしたの？」

ヴィクト、人形に近づき、

「これ……クジマーの顔じゃない?!」

クリスト「……」

クジマー「……」

クジマー、人形に近づき凝視する。

みるみる顔が強張る……と、ドアに向かう。

クリスト「何処へ行くんだ？」

クジマー「……ペーチキンに……ペーチキンに言ってやるん

だ……あいつなんか全然取るに足らないって」

クジマー、去る。

クリストとヴィクト、クジマーを見送る。

ヴィクト「どうしたのクジマー？」

クリスト「クジマーはね……シャーウッドの森に帰ることを

“今”決めたんだ」

ヴィクト「シャーウッドの森ってロビン・フッドの居るとこ

ろ？」

クリスト「……そう」